

北 欧 巡 検 報 告

神奈川県立荏田高等学校 安 田 直 樹

I. はじめに

2002年7月21日～8月4日、神奈川県高等学校教科研究会社会科部会地理分科会主催の「北欧」海外研修が行われた。神奈川県内の社会科の教員を中心に29名の参加人員を得て実施された。この研修の報告をしていきたい。コースの概略は、以下の通りである。

7/23 成田空港より出発。コペンハーゲン経由でアイスランドのレイキャビクへ。

(レイキャビク泊)

24 レイキャビクから飛行機で東グリーンランドクルスク島巡検へ。(レイキャビク泊)

25 アイスランド南西部をバスで1日巡検。(レイキャビク泊)

26 レイキャビクから飛行機でオスロへ移動。オスロ半日巡検。(オスロ泊)

27 オスロから飛行機でボードーへ移動。ボードーからバスでナルヴィクへ。途中ティスフィヨルドをフェリーで横断。(ナルヴィク泊)

28 ナルヴィク市内巡検、夕方の列車でキルナへ移動。(キルナ泊)

29 キルナ1日巡検。寝台列車でストックホルムへ移動。(車中泊)

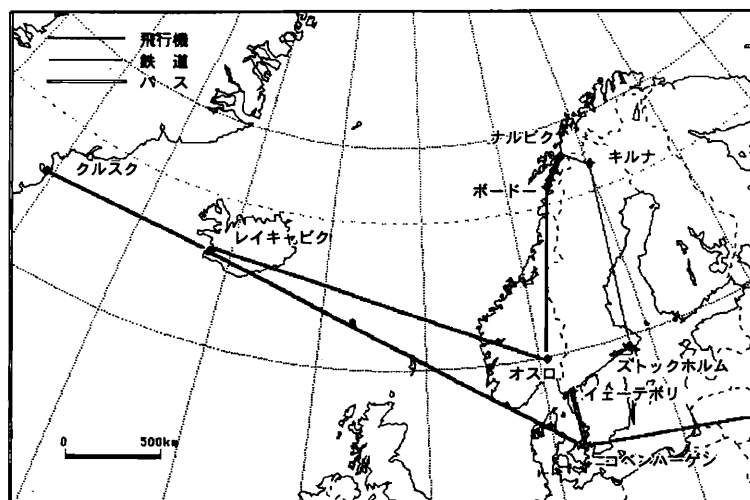
30 スtockホルム市内1日巡検。(ストックホルム泊)

31 特急列車X2000でイエーテボリへ。市内見学後、バスでコペンハーゲンへ移動。途中、海峽架橋を渡ってスウェーデンからデンマークへ入る。(コペンハーゲン泊)

8/1 コペンハーゲン半日巡検。夕方、飛行機で成田へ移動。(機中泊)

2 成田空港着。

ルートマップ



II. 北欧巡検報告

【1】東グリーンランド・クルスク島

デンマーク領グリーンランドは、日本の面積の約5.7倍、世界最大の島として有名である。総面積の約90%が北極圏に属し、全島の約85%が氷河でおおわれている。海岸部には巨大なフィヨルドが形成され、内陸に向かって氷河が高くなり、最も厚いところでは3000mをこえる。島のほとんどが氷河に覆われた氷雪気候で、南部の沿岸部はツンドラ気候である。グリーンランドの総人口は5万5千人ほどで、そのほとんどが首都ヌークなど西部グリーンランドに住む。住民は先住民であるイヌイット族とデンマークからの移住者の混血がほとんどだが、東部のアンマサリクには2千人を超す純粹のイヌイット族が暮らしている。

今回の巡検では、流水やアンマサリクフィヨルドを上空から観察しながら東グリーンランドのクルクス島を訪れる予定であったが、残念ながら天候不順で上空からフィヨルドを確認することはできなかった。流水は、着陸寸前に高度を下げたところで上空から確認できた。空港付近の気温は7℃で、一気に冬に戻った感じがした。空港から徒歩でイヌイットの集落を目指して移動した。途中、ツンドラ独特のこけに覆われた土壌と短い夏の間に咲く何種類かの花を確認できた。

イヌイット族の集落は、思っていたよりは近代化が進んでいて、郵便局、小さなストアがあった。この住民は、伝統的なアザラシの狩猟や漁業を生活のかてにしているようだが、観光客も多く訪れるため、観光客相手の民芸品作りや流水船の運行など観光からあがる収入も多いと思った。家の軒先にアザラシの肉を干している様子や、アザラシの皮を海水につけてなめしてる様子が確認できた。過酷な自然の地でも着実に近代化が進んでいて、イヌイットの生活も変化してき

ていることを強く感じる事ができた。

イヌイットの集落から、流氷の海を彼らの小型漁船に乗って空港付近まで移動した。流氷の海の上は気温2℃。風の影響からか体感気温は氷点下、厳冬を体験する。流氷は海面近くが鮮やかなブルーでとても神秘的に見えた。霧がかかっていて見えにくかったが、対岸に氷河を確認することができた。



イヌイットの集落



流氷の海とかすんで見える氷河

【2】アイスランド

ヨーロッパで2番目に大きい島アイスランドは、北極圏のすぐ近くに位置している。地質的には、ヨーロッパでもっとも若く現在でも成長を続けている。島は、中央大西洋海嶺(ギャオ)の真上に横たわっていて、島内でその裂け目を確認することができる。また、世界有数の火山島としても知られ、現在でも活発に活動を行っている火山も多い。そのため、火山の地熱を利用した地熱発電、温室野菜栽培、温泉を利用したクアハウス等も多くある。北極圏に近いことから、氷河に覆われているところも多く、氷河面積の合計は全国土の11.5%にあたる11800平方キロメートルもある。

島内1日巡検を通じて、アイスランドの気候的特色、地形的特色を中心に自然地理学的特色を中心につかんできた。

☆主な見学地

シングヴェトリル国立公園

首都レイキャビクから北東に約50km。930年に世界で初めて民主的な会議が開催され、憲法を制定し、議会制民主主義が確立した地として有名。この周辺は、氷河に包まれた山や溶岩台地が続き、世界の割れ目といわれるギャオを観察することができる。そのギャオのうちで幅が広いものの一つを9～10世紀に無人島であったアイスランドに移住してきたノルウェー人が議事堂として使用した。ギャオの崖は垂直に切り立っていて、その高さは6階建てのビルほどもある。垂直の岩は音を良く反射し、天然の大ホールの役目をする。マイクもスピーカーもない時代に、集まった多くの人が議論し、ここでの全員議会を可能にしたと考えられる。ギャオの裂け目に水が流れ、

いくつかの滝や川を形づくりながら、この国最大の湖を形成していた。ギャオの中には、幅数十cmのものもあった。南を向いてそのギャオをまたいで立つと、左側にユーラシアプレート、右側に北米プレートが湧き出るさまを感じることができた。日本の近くでこの二つのプレートが再び地球の内部へと沈み込んでいくことをそこで想像して不思議な感じがした。



ギャオをまたぐ



グトルフォス（黄金の滝）

グトルフォス

黄金の滝という意味のグトルフォスは、氷河の溶けた水がギャオの割れ目に流れ出した川が形成した大きな滝である。この川にイギリス資本の手によって水力発電所が建設されることが決まっていたのをシグリットという1少女の建設反対運動が実って建設中止が決定、自然の景観が守られたという場所でもある。この女性の像が滝の近くに建っていた。滝のすぐそばまで歩いていけるが、水しぶきがすごくびしょぬれになった。

ケリズ火口湖

約3000年前の噴火でできた直径200m、深さ約55mの火口湖である。火口にたまった水は、深緑色をしていて規模は小さいものの蔵王のお釜に似ていた。島内にはこのような火口跡やクレーターがたくさんある。

ゲイシール

ここは、英語のgeyser(間欠泉)の語源になっている間欠泉である。現在、休止中であるが、となりの新しいストロククル間欠泉は、ほぼ7分おきに約60℃の温泉が噴き出していた。噴き出す温泉の珍しさからか、観光スポットとして近くにはホテルやレストハウスがあった。噴き出す温泉を見学する人も多く見られた。この近くからは、遠くにラングヨークトル氷河を見ることができたが、残念ながら、天気が悪く霧の中にかすんで見えなかった。

クヴェラゲルジ

レイキャビクの南東約30kmに位置する。温泉の地熱を利用して、果樹や野菜を栽培するための温室(グリーンハウス)が多く建設されている。またここには、温泉を利用したクアハウスや自然健康維持のためのサナトリウムもある。

ここには、観光用の温室もあり、温室内にパイプをはりめぐらせ、中に地中からくみ上げた温泉を流して、温室内を一定の温度(約23℃)に保つのに利用していた。ここでは、花や観葉植物が栽培され、即売されていた。箱根の「芦の湯フラワーセンター」に似ている印象を受けた。農業用の温室では、トマトなどの野菜とバラ、ユリなどの花卉が栽培されていた。

レイキャネス半島溶岩流

アイスランドで一番新しい約1100年前の噴火によって流れ出した溶岩流を、レイキャビクの南西約25kmのレイキャネス半島南部で確認することができた。新しい溶岩流跡は、コケ類など植生が限られていてまだ灌木や草はあまり生えていなかった。

ブルーラグーン

地熱エネルギーを利用し、人工的につくられたアイスランド最大の温泉リゾートである。隣接するスヴァルトセンギ地熱発電所のポンプが地下2kmからくみ出すミネラルを多く含んだ240℃の熱水が、広大な温泉施設に利用されている。この高熱の温水は、地熱発電により電気エネルギーを生み出す。さらに、使用済みのミネラルを多く含んだ70℃の温水は、約40℃にしてから、温泉を利用した皮膚疾患治療や温泉入浴に利用している。

ここは、アイスランド一の温泉リゾートとして多くの人が入浴に訪れていた。温泉の成分を含んだ白い泥を顔に塗って、ゆっくりとお湯につかってくつろいでいる人が多く見られた。



地熱発電所とブルーラグーン



漁港に停泊するトロール船

☆アイスランドの農業

島内は、溶岩で覆われているところが多く、農地はあまりない。農地は国土の約1%で、そのほとんどが牧草地である。車窓から確認できた農業の様子は、溶岩台地上にわずかにつくられた牧草地とそこに放牧するポニー、羊、牛の姿。小さな畑にはジャガイモ、キャベツ、カブなどが植えられていた。ポニーは、この島特産で、乗馬用の他食用にも利用されている。地熱を利用した温室では、野菜やくだもの、花卉の栽培が行われていた。

☆アイスランドの漁業

漁業は盛んで、タラ、ニシン、サケ、スズキ、シシャモなどの魚が水揚げされる。アイスラン

ドの全商品輸出の約7割が水産物及びその加工品である。漁港には、小型の漁船の他、大型のトロール漁船も停泊していた。漁港には水産加工場があり、水揚げされた魚の加工を行っている。日本には、シシャモ（キャペリン）、甘エビ（ホッコクアカエビ）などの魚介類が多く輸出されている。日本に流通するシシャモ、甘エビの多くがアイスランド産である。

☆温泉熱の利用

首都レイキャビクでは高台に温泉供給施設（ペルトラン）を設け、市内の各家庭に温泉を供給している。温泉供給率は99%。ペルトランは、展望レストランも備えていて、市民の憩いの場となっていた。また、温泉熱は先に述べたような地熱発電や温室にも利用されている。

地熱発電や豊富な水を利用した水力発電によって得られた安価な電力を利用してアルミニウムの精錬産業が発達している。レイキャビク郊外に大きな工場がある。

【3】ノルウェー オスロ市内

レイキャビク出発便の遅れとオスロ空港で時間がかかったため、オスロ市内のホテル到着が午後4時近くになる。予定より少ない時間での市内巡検となった。

オスロフィヨルドの奥にあるノルウェーの首都オスロは、この国最大の都市でもあり、主要港湾都市であり、経済・産業・文化の中心地である。市の起源は11世紀にさかのぼるが、現在の市街は1624年の大火の後にデンマーク王クリスチャン4世が再建し、クリスチャニアと名付けられた町から発展したものである。1925年にオスロと改名された。ノルウェーは立憲君主国であり、王宮はこのオスロにある。王宮は1848年に完成した黄色い建物で、平日の午後1時半からは、衛兵の交代式を見学することが出来る。王宮の周囲に広がる庭園は一般に公開されている。王宮の前のカルル・ヨハン通りを軸にして、国立劇場、国立美術館、博物館、大学など主要な建物が集中している。

巡検は、ノルウェーが世界に誇る現代の代表的画家ムンクの「叫び」、「思春期」が展示されている国立美術館見学からスタートした。「思春期」は現代社会や倫理の教科書の青年期の項目によく紹介されているもので、興味深く鑑賞した。思春期の恥じらいをもった少女の姿がよく表現されていた。その隣には、有名な「叫び」が展示されてあった。なんとも不思議な絵であった。

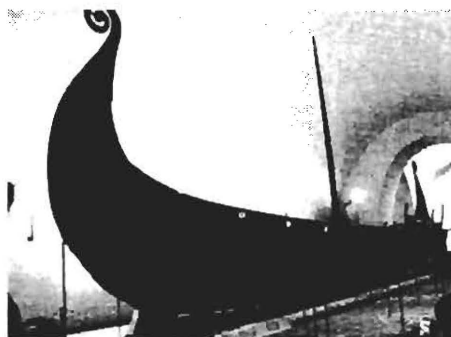
西暦800年頃から1000年頃にヨーロッパの沿岸部で活躍したヴァイキングは、ノルウェーを本拠に活動していた。ヴァイキングに関する資料と8～9世紀の埋葬に使用したと考えられているヴァイキング船は、ヴァイキング船博物館に陳列されている。博物館では4隻の復元されたヴァイキング船とそれとともに出土した荷車やそり、さまざまな生活用具を見学することができた。

市庁舎のホールは、ノーベル平和賞の授賞式が行われる場所として有名でホールの壁にはすばらしい壁画が描かれていた。オスロでのこれらの施設の見学から、この国の歴史と文化についてそのすばらしさを多少なりとも感じ取れたと思う。

また、オスロ港は、この国の貿易の中心で、ノルウェーが世界に誇る海運業の本拠地でもある。市庁舎前の埠頭の横は、かつて倉庫群であったところだが、現在は再開発が進みアーケル・ブリッゲとよばれるおしゃれなベイサイドエリアになっている。港の雰囲気や倉庫群の再開発など横浜港と共通する点を強く感じた。



オスロ港湾再開発地区



復元されたヴァイキング船

【4】ノルウェー ボードーからナルヴィク

オスロから北部の港湾都市ボードーまで飛行機で移動。ボードーは、オスロから北へ向かう鉄道の終着駅で北極圏地域への入口となっている交通の拠点でもあり、ニシンの加工業が盛んな港湾都市である。オスロからボードーへ飛行機で移動途中、北極圏に入った。

ボードーの港には、多くの漁船が入港していて、中には船内でゆでたエビを船上で売る船もあった。ここボードーでは6月2日から7月10日までが白夜の時期である。

ボードーからナルヴィクへはバスを使って移動。途中フィヨルドの海岸線、氷河のつくり出す地形を車窓から確認することができた。この地域のフィヨルドは、ノルウェー南部のソグネフィヨルドのような大きな規模のものや、高くそびえ立つ大きく急な断崖までとはいかないが、中規模の断崖が見られ、その中に所々氷河の削りだした跡である氷河削痕や断崖を流れる滝（カスケード）を確認することができた。また、山の斜面にはカールを確認できるところも多かった。車窓から見える森林は、意外と広葉樹が目につき、特に白樺の木が多く見られた。緯度の割には、温暖な気候であるということを植生からも確認できた。フィヨルドに面した緩やかな斜面を利用して、牧草地やジャガイモ畑が車窓より確認できた。牧草地では、乳牛、馬、羊の放牧する姿が見られた。フィヨルドの湾には、漁船が停泊する港がいくつか有り、フィヨルドの突き当たりの比較的大きな漁港には、サケの養殖場があった。海岸沿いにはキャンプ場も何カ所か有り、オートキャンプやバンガローでのキャンプを楽しむ人の姿があった。

途中、フェリーでティスフィヨルドを横断した。約30分に対岸まで渡るのだが、フィヨルドを大きく迂回する道はなく、フェリー航路が道路の一部になっているようであった。ノルウェーの海岸線は、フィヨルドの海岸が連続しており、南部のベルゲン近くのソグネフィヨルドやハルダ

ンゲルフィヨルドは、200kmも切り込んだ大きなフィヨルドとして有名だが、数10kmから100km規模のフィヨルドはたくさんあり、ティスフィヨルドもその一つである。ここでは、氷河の作り出した深く入り込んだ海岸線を船に乗りながら観察し、日本では見ることのできない雄大なフィヨルドの海岸地形の特色を観察した。



フェリーから見たフィヨルド



高台から見た鉄鉱石積出港

世界最北の旅客駅があることでも有名なナルヴィクは、北緯68° 30' という北極圏にあるにもかかわらず、沖合を流れる暖流である北大西洋海流の影響で、冬でも凍り付くことのない不凍港をもつ都市として有名である。ナルヴィク港には、スウェーデンのキルナ鉱山で採掘される鉄鉱石が国境を越えて鉄道で運ばれてきて、ここから積み出されていく。北極圏内にあるここは、夏の時期は太陽の沈まない白夜の日が約50日も続く。逆に冬は太陽が顔を出さない暗い日が続く。暖流の影響で緯度のわりに穏やかな気候で、7月の平均気温は11℃。東京の3月下旬から4月上旬のころの平均気温に近い。ただ、日によっては気温が30℃近くに上がる日もあるという。しかし、今回は天気が悪く、日中でも十数℃までしか上がらず肌寒かった。

ここでは、ナルヴィク港を中心に見学し、港湾設備の様子、鉄鉱石積出港としての機能等についての特色を把握することができた。キルナからは52両編成の鉄鉱石運搬車が1日に12本運行しており、1日あたり約80トンのベレット状に加工された鉄鉱石が運び込まれる。港では、運び込まれた鉱石が貨車から巨大なコンベヤーを使って直接船に積み込まれていた。1日1隻入港し、鉄鉱石を積んで出港していく。この日見学した船は、ベルギーのアントワープからきていた船であった。昨日はビルバオ（スペイン）、明日はブレーメン（ドイツ）と各地から入港してくる。ベレット状に加工した鉄鉱石を降ろした貨車には、ノルウェー産のかんらん石を積んでキルナへ運んでいる。この石は鉄鉱石をベレット状に加工するのに鉱石に混ぜて使う。

ナルヴィクでは、市内を巡検しながらノルウェーの家屋の様子も確認することができた。木造の家屋はカラフルな色に着色され、外観はとてもきれいである。窓はレースのカーテンで飾られ、キャンドルや花、食器などを窓辺に外から見えるようにおいて飾っている。多くの家に、半地下の部屋がつくられていて、食料の保存庫などに利用されている。

【5】ナルヴィクからキルナ

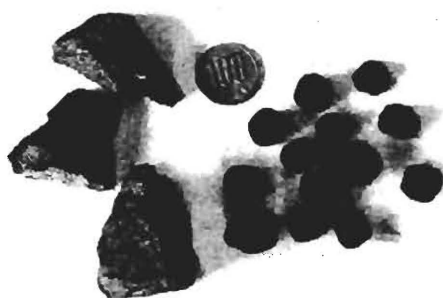
15:45発、ストックホルム行きの世界最北の旅客列車に乗って国境を越えスウェーデンのキルナに移動する。列車は、海拔0mのナルヴィクを出発すると、所々にフィヨルドを眺めながら徐々に標高を上げていき、スカンジナビア山脈を越えて16:25にスウェーデンへと入っていった。車窓からは、スカンジナビアの壮大な自然が感じ取れた。キルナには18:40に到着。

キルナは、北極圏に位置し、人口約27000人の都市。トナカイの遊牧をしながら生活してきたサーミ民族(ラップ人ともいう)が暮らすスウェーデン北部ラップランドの代表的な都市である。山岳地帯を市域に多く含むため、市の面積は、世界有数の広さである。1900年、本格的に鉄鉱石の採掘が始まると街も形成され、以後鉱山の町として発展した。ここで産出する鉄鉱石は、1903年に正式開業した鉄道によってノルウェーのナルヴィク港まで貨物列車で運ばれ、不凍港であるナルヴィク港から積み出されている。

キルナ鉄鉱山の坑道に1998年にオープンした鉄鉱博物館があり、坑道を見学できるほか、ドリルを使って手作業で採掘していた頃の時代からコンピュータ管理をして採掘をする現代までの歴史や、採掘された鉄鉱石の展示がされている。鉱山を経営するLKAB社の専用バスに乗り、坑道を進む。世界一の規模を誇る鉱山だけに思った以上に広い。山頂から地下540m（坑道の入口からは約300m下がったところ）にある横に広がる1985年までに鉄鉱石が掘られていた坑道が鉄鉱博物館になっている。ここで、キルナ鉱山について多くのことを学ぶことができた。鉄鉱石とペレット状に加工された鉱石は自由に持ち帰れるようになっていて、教材用に少し持ち帰った。



キルナ鉱山全景



鉄鉱石とペレット状に加工した鉱石

市の中心にある市庁舎は、1964年に建造された当時スウェーデンで最も美しいといわれたモダンな建物で、屋根の上には時計台が建っている。市庁舎の東側の丘の上にあるキルナ教会は、サーミ族のテントの形を模して建造された総木造りの教会である。鉱山を経営するLKAB社が教区に寄付をして1912年に建設された。中にはいると木の香りが心地よく、木のぬくもりを感じた。内部は、教会と思えないような設計になっていて、コンサートホールとして人びとが憩える場所としても使えるという。

キルナから東に17kmほどのところに位置するユッカスヤルヴィは人口約200人のサーミの村である。ここでは、サーミのテントや古い小屋が再現されていて、古くからのサーミの生活の様子を知ることができる。実際に使われていたサーミの学校や住宅を移築した野外博物館もある。ここで、サーミの人の案内で、サーミの生活やトナカイとの関わりなどを知ることができた。サーミの案内人の話によると、トナカイの飼育で生計を立てている人は住民の1割程度しかいなく、他は、キルナに働きにでたり、観光業を収入源にしているという。テントや小屋を再現している様子や工芸品などを土産物として売っている様子は、なんだか、北海道の観光地化されたコタンにすこしにしていた。また、ユッカスヤルヴィは、冬には氷でつくられたアイス・ホテルでも有名なところである。

市庁舎の北側にあるサーミゴードンは、別名サーミハウスとも呼ばれ、この地方に暮らすサーミ族の集会所となっている。ここでは、サーミ族の伝統工芸品の展示がされた博物館がある。

キルナでは、これら施設と鉄鉱山の見学をし、鉱山とともに発展した町の様子と鉄鉱山での採掘の様子を知ることができた。ユッカスヤルヴィにあるサーミ民族の集落の見学からは、サーミ民族の生活・文化・社会などを知ることができた。キルナ発18:50の寝台列車に乗りストックホルムへ向かった。



サーミのテントとサーミ族の案内人



サーミの飼育するトナカイ

【6】ストックホルム

スウェーデンの首都で、メーラレン湖がバルト海の入江に流れ込むところにあって14の島や半島にまたがっている。これらの島々は40数個の橋で結ばれていて、水路と街の景観からストックホルムは「北欧のヴェニス」とも呼ばれている。ストックホルムの中央にあるスタッスホルエン島を中心にヘルゲアンズホルメン島とリッダーホルメン島を含めて旧市街のガラム・スタンを形成している。ここには、1760年に建造されたオランダ・ルネッサンス様式の宮殿がある。この王宮は、部屋数が608あるヨーロッパ最大級の王宮で、代々国王が暮らしている。ここでは、イギリス式に衛兵の交代式も行われている。9～5月は、王宮の一部を公開している。今回の巡検では、残念ながら時間が合わず交代式を見ることはできなかったが、市内を馬に乗って移動する

衛兵の隊列を見ることができた。

旧市街ガラム・スタン内部は、中世の町並みの趣を残している。狭い路地の両側に並ぶ建物は、16～18世紀に建造されたものがそのまま残されているものも多い。建物の地下にある穴蔵は、14世紀のものまで残しているものもあるという。ガラム・スタンの北側には、新市街が形成されている。この新市街の象徴として1923年に完成した市庁舎がある。高さ76mまで上れるタワーからの景観は素晴らしく、旧市街と新市街の対比、メーラレン湖の遠景などとても美しい風景を見ることが出来た。市庁舎2階にある「黄金の間(Gyllene Sallen)」は、ノーベル賞の晩餐会が開かれるところとして有名。

新市街には、この他バロック様式の建造物オペラ座、ノーベル賞授賞式が行われるコンサートホールなどこの都市を代表する建築物がある。コンサートホール前の広場では露天市が立ち、野菜や果物、花、日用品などを売る露天が数多くでていた。北欧の短い夏を楽しむかのように公園や広場では、水着になって日光浴を楽しむ人の姿が目立った。

ストックホルムでは、歴史ある建造物の数々を見学するとともにこれら歴史的景観を大切にす市民の姿勢を感じ取ることができた。また、路地ごとにゴミ箱が設置され、環境に配慮する国民性が感じられた。ホテルのゴミ箱も3種類のゴミに分別されていた。



市庁舎の塔から見たガラムスタン



コンサートホールと露天市

【7】イエーテボリからコペンハーゲン

ヨーロッパを代表する自動車メーカー「ボルボ」のある都市として有名なスウェーデン第二の都市である。また、イエーテボリを中心とするベストタイェテボラ県は神奈川県と姉妹県となっている。ここには、スカンジナビア最大規模の港があり、スウェーデン一の貿易港になっている。町の歴史は比較的新しく、1618年にグスタフ・アドルフ王によってイエータ川の河口に町が建設されたのに始まる。18世紀の初めにスウェーデンの東インド会社が創設されて、この国の海運業が大きく飛躍したことがきっかけとなってイエーテボリは繁栄していった。1832年には、ネルン湖まで通じる全長190kmのイエータ運河が開通、この運河と内陸の湖沼を結ぶ運河によって首都ストックホルムまで通じている。この運河沿いには、17世紀に裕福な商人が建てた石の建造物が

数多く残っている。また、東インド会社の建物も「歴史民族博物館」として運河沿いに残っている。現在、運河は貨物船の運航に利用されるよりは観光船の運航に主に利用されているようである。ここでは、町の様子を見学するとともに企業視察をする予定であったが、ボルボ社の工場を含め製造業の工場はすべて夏休み中のため、ボルボ社本社敷地内の車窓見学とボルボ博物館の見学をした。

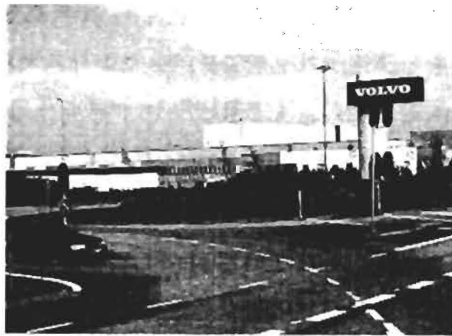
広大な敷地には、トラック部門、乗用車部門等にわかれていくつもの工場があり、近くには下請けの工場が多く集まっていた。敷地内にはパーツ工場の他、研修センター、銀行、レストラン、保育園などがあり、一つの町を形成しているようであった。ボルボ社に次ぐスウェーデン第二の自動車会社サーブ社も車で1時間ほどの所にある。まさに、イエーテボリ市はボルボ社の企業城下町的性格も併せ持っているといえる。

かつてイエーテボリには多くの造船会社があり、いくつもの造船所があったが、経済不況と人件費の高騰から製造拠点を海外に求めていく中で、現在は1つの造船会社が残るのみとなっていた。名門造船所の跡地の一つには、ボルボ社の新たな下請けパーツ工場が立地し、ボルボ博物館も造船所跡地に建設されたものである。博物館では、ボルボ社の歴代乗用車とトラック、バスの数々が展示されボルボ社の自動車製造の歴史を知ることが出来た。イエタ川沿いの造船所の跡地の一つは、ショッピングセンター、ホテル、マンション、住宅地へと転用されていた。その他造船所の跡地は、再開発中で、大学の新校舎建設やカメラメーカーのハッセルブラッド社の新工場の建設が予定されている。

誰にでも住みやすい街作りが、イエーテボリ市の姿勢だそうで、都市中心部に流入するトラック等大型の自動車の量を抑える工夫（トラックセルシステム）が採用されていた。中心部の道路は、車道、自転車専用道、歩道がほぼ同じ幅で区分され、幅が狭く抑えられた車道では、車がスピードを出しにくくするための工夫がなされていた。また、汚水処理工場やシェル石油の石油精製工場などから出る余剰エネルギーを使って都市の暖房に還元したり、ボルボ社などの工場の暖房に利用することもされている。都市景観をさまたげる電線等は地下に敷設しており、すっきりした町並みを呈していた。



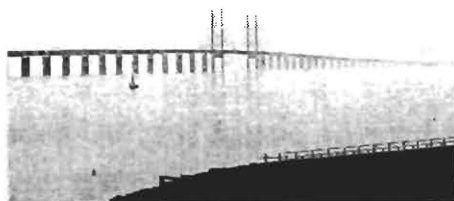
イエーテボリに1つ残る造船所



ボルボ社入口

ここからデンマークのコペンハーゲンまでバスで移動した。途中スウェーデン南部の穀倉地帯を通して海峡架橋のかかるマルメへと向かった。移動するバスの車窓から見える農地の景観も北部と違って広大な畑が限りなく広がっていた。春小麦畑、牧草地、ビート畑、ジャガイモ畑などが確認できた。

スウェーデンのマルメとデンマークのコペンハーゲンを結ぶオアスン海峡架橋は、2000年7月1日に完成した。全長16kmのうち8kmが橋、人工島部分が4km、海底トンネル部分が4kmである。橋は、2層になっていて上層が自動車専用道路、下層が鉄道用に使用されている。この橋の完成により、スウェーデンの首都ストックホルムとデンマークの首都コペンハーゲンが特急電車X2000によって5時間ほどで結ばれるようになった。1日10.5本のX2000が海峡架橋を通る。海峡架橋をバスで通過したが、ここを走行するトラックの数があまり多くないのに気づいた。バスの運転手によると、マルメの北にあるヘルシンボリとコペンハーゲンを結ぶフェリーの料金と橋の通行料金がほぼ同じ為、時間の短縮と休養をかねてフェリーを利用するトラックドライバーが多いという。東京湾横断道路と少し似ていると思った。海峡架橋を通してコペンハーゲンへ到着した。



海峡架橋全景

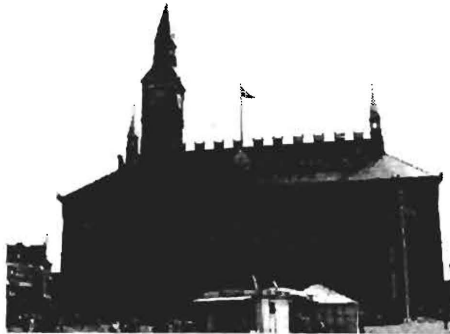


海峡架橋道路

バルト海と北海を結ぶ関門をおさえる北欧諸国中の要に位置するコペンハーゲンは、1167年にロスキルデの司祭であったアブサロンがこの地に城壁と要塞を築いたことを起源とする。その後、近隣諸国との交易がさかんになり、港町として発展を続けた。以来、中世にはハンザ同盟の権力下に置かれた時期もあったが、ずっとロスキルデ司教の領地であった。1417年にスカンジナビア連合王国の首都として王領になり、1419年に王の居城がこの地に築かれた。太陽王と呼ばれたクリスチャン4世(1577～1648)の時代には、通商が大発展を遂げ、街は「ゴールデン・エージ」と呼ばれる時代を迎え発展した。しかし、その後スウェーデンとの戦争(1657～60)、2度の大火(1728, 1795)、デンマークのバルト海制覇を警戒したイギリス艦隊による砲撃(1801)など幾多の苦難を経た。現在の街の原型ができあがったのは19世紀になってからで、外郭を取り壊して公園や湖が整備された。

市域は、シェラン島の東岸にあり、エアスンド海峡をはさんだ向こう側はスウェーデンである。市庁舎のあるストロイエと、アマリエンボー宮殿のあるニューハウンが市の中心部である。赤レンガ造りの現在の市庁舎は、20世紀初頭に完成した6代目のもの。正面入口の上には、街の創設者アブサロン司祭の金色の像が立っている。市庁舎に向かって右側の角には、この国が生んだ世界を代表する童話作家アンデルセンの像がある。アンデルセンの代表作「人魚姫」にちなんだ「人魚姫の像」はここから北東に約2kmチャーチル公園東側の海岸にある。市庁舎そばには、現代の遊園地の原型ともいえるチヴォリがある。ここは、1843年に建設されたアミューズメントパークで、デンマーク一の観光地でもある。夜12時まで営業していたため、昨夜園内を訪れたが、夜遅くでも大勢の人でにぎわっていた。

デンマークばかりでなく北欧の中心地であるコペンハーゲンの見学時間はあまり多くなかったが、人魚姫の像、ローゼンボー宮殿、クリスチャンスボー宮殿などを見学した。旧市街にある天文台でもある高さ34.8mのラウンドタワーの頂上からは市内の様子が一望できた。コペンハーゲンは、他の北欧諸国の首都よりもぎやかでごちゃごちゃした汚い感じもしたが、街にゴミ箱がいくつも設置され環境に配慮する姿勢はここでも感じられた。



コペンハーゲン市庁舎



人魚姫の像

IV おわりに

最後に、発表の機会を与えていただいた、水野先生、後藤先生、弘前大学地理学研究会の皆様および地理学研究室の皆様に深く感謝いたします。

【参考資料】

ICELAND <http://iceland.jp/>
スカンジナビア政府観光局ホームページ <http://www.stb-japan.com/>
在日ノルウェー王国大使館ホームページ <http://www.norway.or.jp/>
外務省ホームページ <http://www.mofa.go.jp/mofaj/>
個人旅行 北欧（昭文社）
海外研修報告書（神奈川県高等学校教科研究会社会科部会地理分科会）